

## IV. 寄稿 - 30年史に寄せて

## 30年史によせて

藤村正哉(前会長・顧問)※

私が日韓文化交流基金の会長に就任したのは1998年(平成10年)4月のことであった。アジア通貨危機の影響で財政破たんの危機に瀕していた韓国は、IMF(国際通貨基金)の管理下に置かれており、既に就任していた日韓経済協会会長、日韓産業技術協力財団理事長の業務が多忙を極めるなか、お引き受けすることを逡巡もした。しかし、当基金の事業を通じて、両国の相互理解ひいては未来志向の日韓関係構築に少しでもお役に立つことが、韓国と浅からぬ縁を持つ自分の使命と考え、就任を決意した次第である。

1925年(大正14年)11月4日、父の任地であった京城(現在のソウル)の家で生を受けた私にとって、韓国は京城中学(現在のソウル高校)まで少年時代を過ごした思い出の地である。色とりどりの花が咲き乱れる春の景福宮、紅葉の美しい秋の金剛山、夏は水泳、冬はスケートを滑った漢江など、四季折々の風景は今でも私の脳裏に焼き付いている。

実は1998年2月の金大中第15代大統領の就任式に日韓経済協会会長として参列し、青瓦台に大統領を表敬訪問した折、大統領より、「藤村さん、調べによるとあなたはソウル生まれということだが、出生地主義だとあなたの国籍は韓国ではないか」と冗談交じりに尋ねられたことがある。「私は日本人ですが、ソウルに生まれ幼少期を過ごした私にとって韓国は心の故郷でありますので、日本と韓国の親善交流の懸け橋として微力を尽くしたい」と決意を述べたところ、大統領はニコニコ頷いて聞いておられた。終生忘れることができない金大中大統領との思い出である。

結局2008年(平成20年)12月、鮫島現会長にバトンタッチするまでの10年余り会長を務めさせていただいたが、2002年(平成14年)には日韓共催

ワールドカップが実現した。加えて、韓国で日本の大衆文化が段階的に開放される一方で、日本においても韓国ドラマ「冬ソナ」ブームに始まる韓流旋風が巻き起こったことは記憶に新しい。お互いの文化に関心を持つ人々が増え、両国の人々の往来も活発になるなど、「近くて遠い国」といわれた日韓の心の距離が着実に縮まっていることは誠に喜ばしく、感慨深いものがある。

2015年（平成27年）の日韓国交正常化50周年を目前にして、足許の日韓関係は難しい時期に差し掛かっている。両国間に横たわる不幸な歴史を思うと心が痛むが、これは時間をかけてでも両国民が乗り越えなければならぬ問題である。日韓が相互理解を深化させ、お互いの国民性を尊重できる関係になってこそ、この問題を解決する新しい道が拓けると確信している。

古の時代より日本と韓国は、よき隣人として交流してきた歴史を共有しており、この固い「絆」が損なわれることがあってはならない。たとえ政治・外交上の問題が生じたとしても、日本と韓国は必ずわかりあえる間柄である。心から信頼できるパートナーとして、いつの日か真の日韓友好親善が実現することを心から願っている。

※藤村正哉前会長・顧問は2014年3月にご逝去されました。

## 日韓間の相互理解を交流促進により増進させる

内田富夫(前理事長・顧問)

2004年の春から2012年の年末まで約8年8か月、理事長として日韓文化交流基金で仕事をさせていただきました。韓国という重要な隣国との交流事業に関わることができたことを有難く思っております。

日韓文化交流基金は、1983年に設立されて以来、「日韓間の人的交流・知的交流を進めることにより両国間の相互理解・相互信頼関係を増進させる」という基本方針に基づいて幅広い事業を行ってきました。

これらの事業のうち最も大きく、また、長期にわたって行ってきたものが日韓間の青少年交流事業です。中学生、高校生、大学生、教員、一般人を対象として主に短期の交流を実施してきたものですが、ここ数年は毎年2000人を超える規模の招聘(韓国の青少年の日本訪問)及び派遣(日本の青少年の韓国訪問)を行うようになっております。8年余の勤務期間中、訪日する韓国の若者たちのほとんど全員と顔を合わせることができたことは望外の喜びです。こうした日韓青少年交流の累計人数はまもなく3万人を突破するでしょう。

基金の事業のもう一つの大きな柱は、日韓両国の学者・研究者・文化人などの交流を支援すること、具体的には、会議や共同研究の実施です。

いわゆる歴史認識問題をテーマとする「日韓歴史共同研究委員会」はここ10年ほどの間に第1期、第2期と2ラウンドが開かれ、真剣かつ白熱した議論の末、第1期が2005年に、第2期が2010年にいずれも大部の報告書を提出しました。

両国の文化人・知識人による「日韓文化交流会議」は、韓国における日本文化開放措置を受けて1999年から2012年までの間都合3ラウンドが開かれ、両国間の文化交流の更なる促進について意見交換が行われました。第

3期会議は日韓文化交流について理念・実務の両面にわたる提言をまとめました。

「日韓新時代共同研究プロジェクト」は、政治、経済、社会、文化の各分野を包摂する未来志向の会議体として組織され、2009年から第1期が、2011年から第2期が行われ、第1期、第2期とも広範かつ具体的な提言を発表しました。

基金はまた日韓の歴史学者・研究者が世界史的な視野で意見交換を行う「日韓歴史家会議」(年1回、日本と韓国で交互に開催)の事務を長年担当してきております。

この他基金は知的交流事業の一部として、両国間の若手研究者の長期滞在支援(フェローシップ事業)を行っており、韓国全国から多数の若手研究者を募って長期の日本滞在を支援しています。日本の若手研究者の韓国派遣も行っています。私は、来日・訪韓するフェローの方々(合計200人近く)とお目にかかって議論させてもらいましたが、日韓交流事業に携わる者として大きな刺激になりました。基金フェロー経験者は日韓累計で600人を超えたと思います。

一方、日韓文化交流基金は設立以来、年に一度必ず韓国を訪問して要路の方々とお会いし意見交換することが伝統となっております。私も2004年(第20回)から2012年(第28回)まで都合9回、基金の訪韓団に参加させていただきました。基金では1999年から毎年、日韓交流の推進に功績のあった韓国の方々に「日韓文化交流基金賞」を差し上げておりまして、このための授賞式を年次訪韓団の韓国訪問の機会に行うことにしております。このような前向きの顕彰事業を行うことは、基金独自の事業として少なからぬ意義のあることと考えます。

小稿を閉じるにあたり、上にあげた各種会議事業にメンバーとしてご参加いただいた皆様にお礼を申し上げます。このうち特に、「歴史共同研究」で第1期日本側座長を務められた三谷太一郎先生、同第2期座長の鳥海靖先生、「日韓文化交流会議」において第1期座長を務めていただい

た三浦朱門先生、同第2期座長の平山郁夫先生（故人）、同第3期委員長の川口清史先生、そして「新時代共同プロジェクト」で第1期、第2期ともに委員長を務めていただいた小此木政夫先生に対し、そのご貢献に敬意と謝意を表します。

日韓両国の関係は、浮沈・変転極まりがありません。「交流促進を通ずる相互理解の増進」という我々のモットーが実を結ばないで見える時もあります。しかし挫けてはならない。元来この地域の問題は広範・複雑・重層的であり、また、歴史の桎梏から逃れることはできません。道遠しと言えども、一喜一憂せず、これからも基本方針に従って歩むしかないのだ、と考えるものであります。

## 基金設立の経過

戸塚進也(理事)

私が初めて参議院議員に当選した1974年(昭和49)頃の北東アジアは、南北朝鮮の対立激化は勿論のこと、韓国国内における軍政や独裁的政権運営に対し、民主化を求める国民の抵抗も強く、その動きを反日行動を強めることで、時の政府は政権運営にあたっており、最も反日運動が激化したのが、日本の教科書の記述が日韓併合時代等を正しく記述していないという反日運動が大規模に発生し、日本を代表して森喜朗、三塚博氏等当時の教育行政の責任者達が度々訪韓して交渉に当たりましたが、納得されず戦争の危機すら感ずる緊張状態が続きました。

当時の私は日韓議員連盟の社会文化委員長をつとめており、両国の関係議員が協議を重ねた結果、両国の専門家により正しい歴史認識を築く為に合同研究機関をつくることや、次代を担う青少年の交流、教職員や学者の相互交流を促進する為に、双方に文化交流基金を設置して活動することで意見が一致し、この構想をクーデターで政権を担った全斗煥保衛司令官を訪ねて要望したことが当基金の実現に向けた第一歩でした。

私を全司令官に引き合わせて下さったのが、李大淳現韓国大学協会理事長と、元韓国教育保険会社会長をつとめ、日本図書多数を扱う教保文庫(現在韓国各地に支店を有する)をつくられた李道先先生でお二人ともに民主共和党国会議員でした。

当時、全斗煥氏は私共の提案に賛意を表されたばかりでなく、当時死刑判決を受けていた金大中氏を死刑にしないという歴史的発言をされ、このニュースは全世界に流されました。

やがて全斗煥氏は大統領に就任され、早速韓国を代表する10人の財閥オーナーを昼食に招かれ、一社一億ウォンの出資を要請され、それが今日

の韓国側基金の設立につながりました。

日本側は、当時民間団体でこのような国際的な大事業に資金提供して下さるのは、日本企業を代表される経団連しかないと判断し、経団連を指揮されていた花村仁八郎先生にお願いし、韓国まで真夏の暑い日に私がお案内して、韓国国会議長をはじめ韓国経済界を代表する韓経連のみなさま、そして全斗煥大統領にもお会いいただきました。

花村先生に決心していただけたのは、小山敬次郎経団連秘書室長(当時)の言葉に尽くせぬご努力や、瀬島龍三先生、五島昇先生そして安井謙日韓議員連盟会長、後藤田正晴先生等日本を代表する有力な皆様が強力なご支援を下されたことも基金実現に大きく貢献されました。

経団連加盟各社の方々が基本財産となった4億円余りを分担して下さり、これをもって当時TBRビル(永田町)に事務局が置かれていた日韓議員連盟の一隅をお借りして基金準備会が発足し、まもなく竹下登先生(当時大蔵大臣)が小倉外務省北東アジア課長に依頼して下さり、財団設立認可をいただくこととなりました。

そして30年間が経過し、今日の日韓関係をみると私達の活動してきたことがどれだけ役に立てたかは未知数ですが、当時韓国の国会議事堂の周囲の彫刻は日本軍の韓国支配時代を表しておりましたし(現在は完全に改修)、全斗煥大統領時代に建設された独立記念館の展示は、日本人が見れば耐えられない内容でしたので、その改善を私から盧泰愚大統領に要望致しましたが、やがて竹下登先生と二人で盧泰愚大統領と会食した際「戸塚さんの要望を展示館の責任者に伝えたところ、未だ展示していないものが2倍もあると言われました」とのご返事でした。

しかし、今回ソウルに建設された大韓民国歴史博物館には、日本を特別に中傷する展示は一切消えていたことを考えれば、私達のささやかな努力でもお役にたてた部分もあると感じ、将来に向けて日韓関係が更に改善されるよう一層の努力をしたいと決意いたしております。

最も日本の国民にお願いしたいことは、二度と再び民族が他民族を支配



するような行為は絶対に起こしてはならないということであり、韓国の人々にこの不幸な時代を思い出させるような言動は、厳に慎んでいただきたいことです。

## 「日韓文化交流基金」30周年を祝して

檜崎正博(理事)

基金の伝統ある事業の一つに毎年実施している訪韓団がある。私は1985年(昭和60年)の第2回訪韓団から毎回参加させて頂いている。何故通称花村ミッションに加わることになり、第29回迄続いたか記しておきたい。

私は関西電力(株)から二度電気事業連合会(電事連)に出向した。1979年から1981年の間は業務部長として、1984年から1986年にかけては事務局長を務めた。1983年に経済団体連合会(経団連)の花村仁八郎副会長が日本と隣国韓国との状況を心配され、文化交流推進の必要性から日韓文化交流基金の設立に盡力された。電事連も経団連のメンバーとして設立に参加した。

その翌年、韓国を直接見て、韓国の政、財、文化界の方々と交流することが肝要と所謂、花村ミッションが実行された。電事連は大垣副会長が参加された。第2回(1985年)の訪韓団に後任の副会長から事務局長の私に参加の指示があった。第3回も同様に参加を命ぜられた。第4回目の1987年は関西電力に復帰していたが、継続が大切と引き続き参加を要請された。お断りしようと思ったが、出向中にご面識を得、様々な御指導を頂いた経団連の小山敬次郎常務理事(当時)と日本鋼鉄連盟の故竹下勅三常務理事(当時)から大阪は韓国と係わりが多い地域だからと強く言われ参加した。

特に第8回の1991年は日程(8月24日～27日)の中に26日に開かれる関西電力の定例取締役役会があり、営業報告を行う役目を担っていたので参加は不可能と考え、小林庄一郎取締役会議長に伺いを立てた。意外にも小林会長は基金から君に参加してほしいといわれているなら参加すべきである。営業報告はほかの役員にさせれば済む事だと社外関係の大事さを諭さ

れた。1999年の第16回目からは理事として参加させていただいているが、訪韓団に参加する度に私事乍、視点の高い上司に仕えた幸運をかみしめている。

訪韓団は「教科書」「竹島」「靖国神社参拝」「従軍慰安婦」等の問題で世間を騒がせた時も躊躇する事なく大所高所から、取りやめる事なく実行した。その効果は大きく気高いと自負していいのではないか。

少なくとも、日本人の全てが韓国ざらいではない事の証しになった。又、韓日文化交流基金の李洪九会長をはじめとする役員の方々は目先の問題には言及せずに、地理的に離れる事が出来ない両国の未来をと気を使われている。更に日流、韓流の流行はもとより、戦後世代の間にほのほのとした交流が幾多芽生えてきている。

これを見ると改めて、花村仁八郎氏の先見の明に感服せざるをえない。併せて両国の基金各位をはじめ関係機関、関係各位の御盡力に改めて敬意を表したい。特に日韓交流お祭りを実行され日韓文化交流基金賞の創設を提案され受賞候補者を推進して頂いているソウル・ジャパン・クラブ(SJC)の存在は得難いものである。

## 今後を見据えた交流事業の実施とフォロー

余田幸夫(業務執行理事・事務局長)

この度日韓文化交流基金が30周年を迎えたことに対し、設立当初から今日に至るまでの間、大変な御苦勞・御尽力してこられた全ての関係者の皆様方に対して心より敬意を表し感謝を申し上げます。

去る6月に私は当基金業務に就かせて頂き、目下事務局長業務を習得すべく努めているところです。この機会に当基金の過去の資料を拝見しながら、当初の日韓議員連盟による設立合意、経団連を中心とした資金集め(花村訪韓団)、基金事務所の開設、1989年から日韓共同事業体の日本側事務局としての基金(政府拠出金)、2007年から5年間のJENESYS(東アジア青少年大交流計画)、2012年のキズナ強化プロジェクト、そして本年からJENESYS2.0の事業開始というように、時代の流れに応じて基金も変貌を遂げ、業務の内容・量ともに増え続けてきている現況がよく解りました。

今日の日韓関係は過去最悪とまで言われているような状況の中で、従来であれば政治関係の悪化と共に文化交流も中止される傾向が強かったようですが、今日では当基金が行っている交流事業は(中・高・大学生、教員、研究者等)、韓国側との間で着々と予定通り進められています。これは過去に関係がギクシャクしても、韓国側との信頼関係の下に忍耐強く地道に種々業務を実施してこられた諸先輩方の努力の成果だと思えます。日韓の若者が胸襟を開いて対話をし、各地を訪れてその国の歴史文化を体感し、ホームステイを通じて学生と受け入れ家族との心の触れ合い、そして別れ際に見せる笑顔と熱い涙は理屈を超えた人と人とのあるべき姿を教えてくれているものと感じます。日韓関係が冷え込んでいる中であっても、近年、訪日する韓国の青少年達を喜んで温かく迎えてくれる地域が日本全国に広がって来ていることも喜ばしい限りです。

両国国民間での交流の裾野を広め、しっかりした基盤を築いていく上で大事なことは、対話の促進や文化の接触等を通してお互いが感じた隣人との友情や絆の大切さを、その後も引き続き確認しあっていくプロセスだと思います。そのためには当基金が時代の要求を踏まえた新たな事業を実施していくことはもとより、それらの事業実施後にフォローもしっかり行っていくことも重要です。交流・フェロー・助成事業の他に、有識者による各種会議において報告されてきた数々の有益な提言についても今後如何に生かしていくかについてフォローしていくことが重要であろうと考えます。

鮫島会長をはじめ皆様方からのこれまでの温かい御指導・御支援に改めて感謝申し上げますと共に、今後更に時流の変化や要請に見合った活動を展開する上に、引き続き大所高所からの叱咤激励をお願い出来れば幸甚に存じます。私達職員一同は、小野理事長を中心に目先に囚われることなく先の先、10年、20年、そして30年先の将来を見据えながら、日韓関係の下支えの一翼を担うとの当基金の設立趣旨を胸に、日韓両国民間の信頼関係の深化のために最善を尽くして参りたいと念じている次第です。

## 日韓文化交流基金創立三十周年に寄せて

小山敬次郎(監事)

時のたつのは早いもの。当基金が設立されてはや30年とは、今更ながら「光陰矢の如し」を実感する。とはいえ、私の脳裏には、設立当時のあれこれが、つい昨日の出来事のように鮮やかに蘇る。日本と韓国の文化交流が、私の思い出の中で重要な位置を占めている証ではなからうか。

思い起こせば、1983年のある日、安井謙参議院議長、後藤田正晴・戸塚進也の両議員、瀬島龍三日商顧問一行が経団連を訪れ、稲山嘉寛会長、花村仁八郎副会長と面談した。日韓議員連盟の社会・文化委員会の合意を受け、日韓文化交流基金の設立につき、財界の協力を得たいとの趣旨。同席した私は、日韓関係に関心の薄い財界の空気から推して、難題であるとの感を否めなかった。私だけではなく、財界全体が、疎遠な日韓の政治的・経済的関係、とりわけほとんど道が開けていない文化の交流を前向きに受け止める雰囲気ではなかったというのが、正直な印象。しかし、すでに全経連と経団連の経済交流に道をつけ、日韓のより広範な交流の重要さに思いを巡らし、心中ひそかに期するものがあつた花村副会長の英断で経団連は協力を踏み切つたのである。

その後設立に至るまでの道程は、決して平坦ではなかつた。募金割当は決まつたものの、実際に募金活動に当たられた戸塚先生はじめその周辺の人々の苦心のほどがしのばれる。というのも、当時の日本経済界の韓国に対する理解は進んでおらず、隣国にもかかわらず、日韓関係の重要性の認識は未成熟だつた。募金を円滑に進めるには、経済人の対韓意識を深める以外にないと考え、財界主要メンバーで構成する文化交流ミッションを韓国に派遣したのが、基金訪韓使節団の始まりだつた。それが連綿と続き、今年で29回を数えたことは感慨ひとしおである。

第1回訪韓団は全経連を訪問し日韓両国経済人の相互理解の促進に努め、さらには軍事境界線を視察して、韓国・北朝鮮の緊張関係を体感し、東西冷戦下の日韓友好の重要性に目覚め、また韓国文化人との対話を通じて日韓文化交流の今後のあり方を探り、併せて募金協力への意識をかき立てることをもくろんだ。

幸い、いずれもみごとに成果を上げ、日本側の対韓意識を良い方向に導くことに成功した。とりわけ、韓国側の代表である李漢基先生の温厚篤実なお人柄と「韓日両国がお互いに文化を共有し合った長い歴史、不幸な関係にあった時代を率直に回顧しつつ、先入観を持たない若者が、未来志向の交流の輪（和）を築くことへの期待」を諄々と説く静かな口調に、全参加者が心を打たれた訪韓の旅だった。

その後訪韓を重ねる度に、日本側経済人の対韓理解は深まり、それに経団連と全経連の財界トップの友好交流が花を添えた。花村副会長は、「日韓文化交流は、我が天命なり」との強い決意のもとに、高齢の身を車椅子に託しながらも、訪韓団の団長として、第13回まで全日程に参加し、日韓文化交流の促進に身を挺したことは、忘れがたい。

こうした先人のたゆまぬ努力と基金が成し遂げた実績は、政府関係者の理解を得、外務省の協力のもとに、30年にわたり日々有意義な活動を続け、今日の慶き日を迎えることができた。「伝統とは革新の連続なり」の至言のもとに、日々新たな工夫を凝らし、新しい伝統を創成することこそが30周年にふさわしい最善の祝意と考える。

## 内より芽ぐみて、古き葉の落つる…

饗庭孝典(評議員)

私が日韓文化交流基金の評議員になったのは、初代理事長を務められた須之部量三さんとの縁でした。須之部さんが韓国駐劄大使で居られたのと殆ど重なる時期にジャーナリストとしてソウルに駐在し、朴正熙大統領の暗殺、全斗煥將軍のクーデター、光州事件に代表される民主化運動と激しい弾圧、金大中氏の死刑判決など、目まぐるしい出来事の連続でしたので、ゆっくりと盃を傾けながら警咳に接するというような機会はほとんどありませんでしたが、折々の取材の場で、須之部さんの日韓外交に対する深い思いに接し、敬意をいただいております。その須之部さんからの誘いがあったので、喜んで、初代評議員の末席に連なりました。

日韓関係は、基本条約を結ぶための交渉が14年に及ぶなど最初から、そして今に至るまで、「難しい関係」であることに変わりはない、というのが私の率直な感想です。須之部さんが大使としての最後の任地として、自ら求めて韓国を選んだとお聞きしていましたので、理由をお訊ねしたところ、「日本の外交にとって、韓国は最も難しい相手。韓国とうまくやればどこの国ともうまくやれる。外交官として最もやりがいのある仕事と思ったので」と言われました。お話の中で「古い葉が落ちで新芽が出るのではない。内から新しい芽が兆し突っ張るので、耐えられずに古い葉は落ちるのだ」という徒然草の一段を引用されることが、ままた、ありました。基金の活動の中心に若い学生や研究者の交流を置いたのも、日韓相互理解の新芽を育てようとしていたのでしょう。

ご自身も駐韓大使に決まった還暦近い年で韓国語に取り組み、在任中、地方を視察する際には、よく韓国語で話をされておりました。村の長老が、「日本の大使さまが『ウリマル』で話をされた」と感激するのを目に



したこともあります。外交も民間交流も相手があるとのこと、こちらの思い通りにならないのは当然です。須之部さんから「なるようにしかならない。が、なるようにはなる。そうなるように努力する」という言葉をしばしば聞きました。たとえ合意は得られなくとも、日韓が主張をぶつけ合いながら、少なくとも相手の立場を理解しようとするのが大事、それを基金の役割にしようと言われていたように思います。

今の日韓関係は「これまでにない難しい状況」と言われますが、何とかなる、「そうなるように努力する」という気持ちで、基金の仕事をこれからも進めなければ、という思いを深くしています。

## いつまでもなつかしい韓国

芳賀 徹(評議員)

日韓文化交流基金が創立されて三十周年を迎えるという。めでたい、と言う前に、もう三十年もたったのかと驚く。

私は初代理事長須之部量三大使に誘われて創立初期から評議員に依属されたのだから、まことに長いおつきあいだったことになる。どうして須之部氏を知るようになったのかも、いまでは定かでない。

1960年代の末の頃から、私が担当していた東大駒場の大学院比較文学比較文化研究室では、鄭明煥とか李御寧とか金東旭、また鄭漢模、金禹昌というような実に面白い偉い学者たちを客員研究員としてつぎつぎに迎え入れていた。同時に韓国人留学生たちも評判を聞いてか、毎年つぎつぎに2名、3名と大学院に入学してくるようになった。みな志の高く、たのもしい秀才・才媛たちだった。この学者、学生の何人かに誘われてはじめて韓国を訪れたのは、1972年の秋、朴正熙大統領による戒厳令下でのことだった。

それ以来、ほとんど毎年1回から2回は様々な名義で韓国を訪れるようになり、ハングルは難しくてついに覚えられなかったのに、韓国と韓国人を知ることが面白くて愉快でならなくなった。その間にあの紳士、須之部氏を知るようになったのだろう。二代目理事長前田利一氏の時代も同様に、日韓合同学術会議にはほとんど毎回参加した。日韓賢人会議というのにも何年間か列席していた。その後も三浦朱門氏、平山郁夫氏を座長とする日韓文化交流会議やその他のセミナーやシンポジウムでは、日韓文化交流基金にしばしばお世話になったものである。

「朝鮮詩集」(初版「乳色の雲」1940年)の名訳者、詩人金素雲氏と相識り、東京でソウルで親しくおつきあいするようになるのは、1980年代の末近

くなってからのことだった。あのころの韓国知識人、大学院生たちとの親交、ほんとうに心底をさらけ出しての交流がなつかしい。眞露<sup>ジンロ</sup>やオールドパーの瓶を空にすると、その盃を箸で叩きながら交互に唱歌や軍歌を唱ったりするようにつきあいだった。それに比べると、近年の日韓間の政治関係はまことに鬱陶しい。なんとか打開しなければならない。それでもあの旧友たち、元留学生たちとの親交はいまもかわらず続いている。朴槿恵大統領のしきりに言う「歴史認識」の問題も、彼らとの間では互いに適当に了解ずみだ。

日韓文化交流基金は三十周年を好機にふたたび日韓間のあの活気ある知的交流と、互いの文化への敬愛の念をうながすことに力を尽くそう。相互の文化への敬愛の念を養うことこそ、真の相互理解と友情を深めることへの第一歩だと考えるからである。

## 私の小さな文化交流

竹内 宏(評議員)

70年中頃には、韓国経済は10%成長を続けたが、中小企業が未発達であって、特に機械産業が弱かった。私は長銀調査部に在籍し、産業連関分析を利用して、新興の韓国経済と日本経済を比較分析して行いソウルで発表した。日本人による韓国経済分析が珍しかったので会場は満員だった。

その頃、韓国は軍事独裁が続いたので、日本の学者は近寄らなかったが、私は、猪木武徳、小池和男、飯田経夫、飽戸宏等の超一流学者にお願いして、ソウルで日本的経営に関するシンポジウムを開き、この時も満席であって通訳なしで議論が進んだ。

大統領府でも日本経済に関心を持ち、全斗煥政権の時、補佐官の金在益氏は商工部の課長クラスの人材を相互に出向させ、理解を深めるというアイデアを暖めていた。独仏はそうして共存の一步を踏み出したという。残念ながら、私は韓国と人的関係を深めたいという公的機関を見つけられなかった。それにも拘わらず、韓国商工部は85年以降、6年間で4名の有望な課長クラスの官僚を長銀調査部に送った。金在益氏は人柄が柔らかい秀才だったが、ランゲーンのテロ事件の犠牲になった。

もう一人の補佐官の許文道氏は、韓国でも日本語を自由に話せるようにしたい。テレビの日本語放送が第1歩になるだろうが、下手をすると大衆が激怒し、政府が危なくなる。私にKBSで日本経済を話してくれと云う。経済なら文句が出ないだろうという。私の40分の番組に出演し、韓国語と同時に聞けるという放映だった。そのせいか、視聴者からに非難は少なかったという。しかし、その後間もなく、教科書問題が発生し、日本語放映の試みは消えた。

80年代に、日本出版会社社長杉浦賢助氏が、韓国は将来日本語出版物の

大きな市場になると予想し、ソウル大学校に日本図書館を造って貰い、そこに、主要な既刊書と今後の新刊書を寄付し続けるという構想をつくり、私は、ソウル大学校や関係者へのお願いにお供した。しかし、日本にはマルクス思想の本が多いことと、東京大学に韓国図書館がないという2つの理由で拒絶された。

こうして、韓国と深い関係になっている時、戸塚進也氏から日韓文化交流基金の仕事に参加しないかと言われ、私は喜んで仲間に入れて貰った。訪韓団花村会長の車椅子を押す係をしばしば仰せつかり、いろいろためになるお話を賜ったが、現在の私は基金職員の長さんに酸素ボンベ運びを手伝って貰っている。

2001年に、留学生の李秀賢氏が、新大久保のホームで日本人を救おうとして亡くなった。韓国では3周忌が3年目になるが、日本では、2年目に終わっており、韓国流の3周忌を開かれる気配がない。在日韓国人はこれでは、母国の人に面子が立たないというので、私が急遽3周忌の委員長になった。韓国の坊さんがお見えになった。同じ発音の般若心経だったが、日本の坊さんは妻帯しているから成仏できないそうだ。

## 日韓文化交流基金設立30周年を迎えて一人と人の絆―

梅田博之(評議員)

日韓文化交流基金(以下、基金と略称する)は本年12月に設立30周年を迎える。誠に慶賀にたえない。その間、基金は、日韓学術文化・知的交流事業(草の根交流、シンポジウム・国際会議、芸術交流)、学術研究者交流(招聘、派遣)、青少年交流事業(大学生・教員等交流―派遣・招聘、中高生交流―派遣・招聘)のほか、青少年交流委託事業(日韓ボーイスカウト・ガールスカウト交流事業、高校生長期招聘事業等)にも関わることによって日韓の各層、各分野における人的交流を行い、大切な隣人との交流の深化に努め成果を挙げてきた。この両国の相互理解にもっとも重要な、人と人の交流のために尽くして来られた歴代の基金理事長、事務局長、理事および職員各位のその間のご努力に深い敬意と感謝の意を表したい。

個人的な話で恐縮であるが、私の韓国初留学はもう50年近く前の1967年2月から69年2月までのことである。ソウル大の東亜文化研究所(所長:故李崇寧博士)にVisiting Fellowとして受け入れていただき、博士のもとで韓国語の調査・研究をしたのだった。李崇寧博士は韓国語学の泰斗として光復後のめざましい韓国語研究進展の中心的存在であられ、研究・生活の両面にわたって懇切なご指導を賜った。また、博士を介して韓国語学をはじめ関連諸分野のすぐれた先生方の知己を得ることができた。他方、韓国外大日本語科にも出講したので、日本語教育の分野の先生方との知遇も得ることができた。教え子の中には後に文部省留学生となって来日した人も多く、今や日本語学・日本語教育の重鎮もしくは中堅の教授となっているものも多い。今に比べると短い留学期間ではあったが、知り合った諸先生方のおかげで私の最初の留学生活はきわめて実り多いものとなった。その関係は帰国後も続き、当時はまだ訪日するのにいろいろ制約がある時

代だったから、研究のために来日する先生方の招聘に努め、また留学生として来日する教え子やその後輩たちを受け入れ支援することによって、更に人と人の輪を、世代を繋げて広げていくことができた。なお、当時の先生方の中には日本時代に小学校を通われた方も多く、ほぼ例外なく日本に来られると小学校時代の恩師の消息を尋ね師弟の絆の回復に努めておられたのには強い感動を覚えた。かの困難な時代にも日本人の先生との間に師弟関係が確実に結ばれていたのである。

その後も国際交流基金派遣や科研その他による長期・短期の出張は数知れないが、私の韓国との関係は、初留学以来培ってきた人間関係がその基礎となっている。このような人と人の絆は何ごとが起きても揺るぎないものと確信している。基金の交流事業、特に青少年交流（中高生や大学生、教員の方々の招聘）の益々の充実と発展を望んでやまない。

## 響かせ続けたい日韓の歌声

前田二生(評議員)

私が韓国と音楽交流を始めた最初のきっかけは1988年「ソウルオリンピック前夜国際合唱祭」に東京レディース・シンガーズを指揮して参加したことであった。会場は完成間もない「ソウル・アートセンター」。当時はまだ日本の音楽や日本語での演奏が禁止されていた時代であったが、「オリンピック」を盾に多くの合唱曲を日本語で演奏した。まさに戦後最初の出来事であった。参加各国の国歌斉唱の際には「君が代」を高らかに歌った。この国際合唱祭における東京レディース・シンガーズの演奏が意外と思える程の高い評価を受けたこともあって、私は日韓の音楽交流に力を尽くすことを心に決めた。

この日の演奏を機に韓国にも優秀なプロの女声合唱団を、ということになり、宣明会児童合唱団音楽監督の尹鶴元氏が翌年の1989年に「ソウル・レディース・シンガーズ」を創立した。その後、両合唱団は姉妹合唱団として交流を続け、ソウル、東京での「日韓合唱コンサート」を度々行った。韓国側から、ソウル・レディース・シンガーズ以外の合唱団の参加で行われることも多かった。

このような交流の中で、(財)日韓文化交流基金との関連で特筆したい出来事があった。交流基金恒例の「訪韓団」に俳人の黛まどかさんが団員として参加されたことがあったがその際に黛さんが釜山からソウルまでを徒歩で踏破した際の紀行句集『サランヘヨ』を拝見。私はとっさに思った。「この『サランヘヨ』をテキストにして合唱曲を作り、それをハングル語に訳したものをプログラムにして、日韓の合同合唱団がソウルと東京でコンサートを開こう。そうすれば2005年の日韓友情年に向けて何よりの日韓文化交流になる」と。



実際に着手してみると、いろいろ難問はあった。しかし実に多くの人々が手を差し伸べてくれた。まずこの企画を後援して下さった日韓文化交流基金。そして合同演奏を快く同意してくれた「ソウル市合唱団」。次に作曲家。新実徳英氏は多忙な中を約束の時間内に曲を仕上げてくれた。そしてハンゲル語訳。俳句をハンゲルに移すのは至難の業であるが、そのご苦勞を当時の駐日韓国大使館文化院柳珍桓院長の金恩令夫人とそのご友人の声楽家金貞玲さんが担ってくれ、ハンゲル語の発音指導も熱心に行ってくれた。

2005年8月、世宗文化会館において「日韓友情年2005交歓コンサート in ソウル」が満席の中で開かれ、苦勞の結晶「サランヘヨ」が高らかに演奏された。このコンサートには折から訪韓中の日韓文化交流基金訪韓団の方々が皆、出席して下さった。感激の極みであった。

その年の10月には紀尾井ホールで、同じ日韓メンバーによる「日韓友情年2005交歓コンサート in 東京」が盛大に開かれたのは勿論であった…。

## 黙々として歩く交流の道

大竹洋子(評議員)

30周年を迎えた日韓文化交流基金の訪韓団員に加えていただいたのは、2001年第17回からです。早くも12年が過ぎ、13回目の訪韓の旅を終えたばかりの今、私は12冊の報告書を読み返し、創立時から営々と築きあげ、決して希望を失わなかった先人たちの想いを忖度しています。

なぜ私に訪韓団のお話があったのか、そのきっかけは2000年に製作した記録映画「伝説の舞姫 崔承喜—金梅子が追う民族の心」(藤原智子監督)ではないかと思われまます。岩波ホール総支配人の高野悦子さん(故人)と東京国際女性映画祭ディレクターの私の両人がお誘いを受けたのですが、あいにく高野さんは都合がつかず、私が恐る恐るその第一歩を踏み出しました。団員12名中、女性は私一人でした。この状態は現在も殆ど変わりません。13回の中で高野さん2回、黛まどかさん2回の参加がありましたけれど、この二人が重なった回もあり、通算10回はおこがましい表現ながら私が「紅一点」だったのです。

初めて参加した折の事務局長、久一昌三さんは1984年製作の長編劇映画「伽椰子のために」(小栗康平監督)の撮影時には、外務省北東アジア課の地域調整官でした。韓国の土饅頭のお墓のシーンを撮りたいという監督のたつての願いで、私は外務省を何度も訪れ、久一さんも大変な努力をしてくださったのですが、大衆文化開放前の時点では叶えられるはずもなかった、それ以来の再会でした。この「伽椰子のために」の上映に関しては、一生懸命にテーマ曲の「ポンソンファ」(鳳仙花)をハンゲルで憶え、韓国の歌手と間違えられながらあちらこちらで歌っては、チケットを売った日々のことを思い出します。あの頃は日韓文化交流の席に自分が座るなど、想像もつかなかったのです。

さて、四たび五たびと築かれる両国間の壁は、寄せては返す波のように尽きることがないのか、どうすればこの循環を断ち切れるのか、私には全く判りません。これまでの過程のなかで、韓国人の対日感情は今年がいちばん悪いという話を、先頃お会いした韓日文化交流基金の方々からお聞きしました。そんな時に迎える日韓文化交流基金の30周年です。途方に暮れながらも私は、13回の公式訪韓の際の忘れられない言葉を反芻します。「人生には照る日も曇る日もあります。しかし我々は黙々として韓日文化交流の道を歩いてゆくのです。若者の背中を押してゆくのです」第19回の晩餐会前におこなわれた、前韓日文化交流基金会長・具滋景さんのスピーチです。2004年から始まったソウル国際女性映画祭と東京国際女性映画祭の姉妹友好関係は、着実に成果をあげています。元従軍慰安婦のハルモニたちを描いた「ナムムの家」及びその続編も、既に上映しました。私は全てを映画から学んできました。西アフリカ・セネガルの映画監督ウスマン・センベヌさん(故人)のメッセージ「難しいかもしれないけれど、人は自分を受けとめ、働き、泣かず、他の生活を無断で利用せず、また許してはならず、されるままになってもいけない。人間が一人前になるとはこういうことかもしれません」を肝に銘じる私は、この言葉が私の文化交流の基本ではないかと思うのです。

歴代の会長、理事長、理事、私も途中から仲間に入れていただいた評議員の皆さまの、絶えざるご努力と奮闘に衷心よりの敬意を表します。そして女性として映画人として、私も力の限りこの道を歩いてゆこうと心を新たにしています。

## 日韓文化交流基金の思い出

坂上 功(元事務局長)

担当することになった頃の基金は、須之部理事長は無給で、ある大学の教授でもあったため、週に一回、しかも半日だけの出勤で、また職員も採用したばかりの数名のみであったことから、私がすべての業務に目を通さざるを得ないという状況でありました。その後、須之部理事長の後任に前田理事長が就任、常勤となり、私も1991年に外務省を退職して、正式に基金の事務局長となり、以後7年間に亘って基金の事業に従事しました。

事業の当初は、交流事業の為の日本の大学生を募集しても応募者が少なく、伝を頼って大学の教授や知人に依頼して、大学生を集めてもらい、ようやく訪韓団を結成することができたというような有様でした。また、訪韓団が慶州の古墳郡の前で、修学旅行中の韓国高校生の一団に囲まれてツバを吹きかけられたというような事件もありました。当時、ある上司から「日本よりも歴史が古く、かつ独立国であった韓国を日本が併合してしまったことが、反日の大きな原因の一つである」と言われ、また、ある研究所の所長からは、「日本と韓国とが本当に仲良くなるには200年ぐらいかかるかもしれない」と言われたことがあります。

日本と韓国との真の友好親善関係樹立の為の道のりには、確かに難しい問題が多々存在しているのは事実で、それだけに基金の役割りは極めて重要であり、今後とも地道に、根気よく種々の交流事業を推進してゆくことが肝心であると痛感している次第です。

## 日韓文化交流基金30周年に寄せて

久一昌三(元理事)

基金創立30周年、おめでとうございます。

当時を振り返り、事務局長としての私の在任時のいくつかの出来事について述べたいと思います。

私が基金に在職したのは、1998年4月から2002年6月までの4年間で、当時の基金は、既に港区虎ノ門のビルに移転し、外務省の委託を受けて「日韓平和友好交流計画事業」を本格的に展開していた時期で、職員は皆若く、活気に満ち、職場の雰囲気も非常に良好でした。

当時の基金には、内部規則が未だ整備されておらず、職員の身分・待遇についても、ただ「国家公務員並み」といった口伝しかありませんでした。そこで、私は基金が契約していた会計事務所の勧めもあり、内部規則の成文化を行うことにしました。

その作業が一段落した頃、基金の主務官庁である外務省の監査を突然受けました。この監査は創立後初めてのことでしたが、思いのほか好成績で職員一同安堵した次第です。

次に、1999年4月、「日韓文化交流基金賞」を創設したことですが、当時の基金自体の事業としては、①毎年基金の理事を中心とした代表団を韓国に派遣し、韓国の要人との交流を行うことと、②若干名の日韓両国の若手学者の派遣及び受け入れを行うという2事業を実施していました。しかしながら、長期にわたる低金利のため、基金自体の事業の運営がままならない状況になりました。たまたま外務省の委託を受けて同様の日韓両国の学者の派遣と受け入れ事業を実施していたので、基金自らの学者の派遣・受け入れ事業を廃止し、その代わりに「基金賞」を創設した次第です。

確か、2001年の秋頃、九州の久留米市の某実業家より突然電話があり、

「基金の事業に賛同し、100万円の寄付をしたいので、振込口座を教えてください」との有難い申し出がありました。基金内部には寄付者の身元と意図がはっきりしないままでは受け入れに反対との意見もありましたが、寄付者のご好意をありがたく受け入れることにし、同寄付金をソウルにある翰林大学日本学研究所（池明観所長）の日本語教育施設整備に対する助成事業の一部に利用しました。現在のような世知辛い世相では、このような善意の寄付金の申し出は、あとにも先にも出てこないのではないかと思います。

最後に、基金の益々の発展を祈念いたします。

## 日韓相互理解を目指して

堀 泰三(元理事・事務局長)

私は、2002年6月から2008年4月まで約6年間、日韓文化交流基金の事務局長を勤めました。

基金の中心事業である日韓両国の青少年交流は、両国間の定期閣僚会議や首脳会談の際の共同コミュニケや共同新聞発表等で必要性が強調されてきました。

外務省による韓国青少年団の訪日招聘事業は1972年度より始まり、日本学生団の訪韓事業は1985年度より始めました。当時、私は外務省の北東アジア課で勤務しており、学生の選抜を手がけ、自ら団長として訪韓したこともありました。この青少年交流事業は次第に拡大されていき、北東アジア課の職員のみでは処理できなくなり、1989年(平成元年)より、外務省が基金に必要経費を拠出するとともに事業を全面的に委託することになりました。従って、私は外務省を定年退職してから基金で勤務しましたが、仕事の内容については全く違和感がありませんでした。私が基金に入った時は、村山総理談話に基づく「平和友好交流事業」(1995～2004年)が継続しており、その一環として、韓国の文化を研究するための図書センターが開設されており、職員とともに図書の充実に努めました。私の在任中に蔵書は2万冊から2万5千冊になり、韓国研究者には重宝がられていました。しかし、その後、民主党政権時代の「事業仕分け」により、利用者数が少ないとの理由で、2011年に図書センターが閉鎖されてしまったことは残念です。基金の図書センターは、もともと韓国・朝鮮関係の研究者や学生を対象として、専門書を中心に収集していたため、利用者数に限度があるのはやむを得なかったと思います。今後は、これらの図書が寄贈先の大学等の図書館で積極的に活用されることを祈ってやみません。基金の

思い出で印象深いのは、毎年1回行われた基金の役員を中心とする訪韓団のお世話でした。ソウルにおける韓日文化交流基金主催の歓迎晩餐会、政府関係者への表敬訪問、答礼レセプションにおける基金賞授与式（1999年より毎年3、4名の日韓文化交流に貢献した韓国人を表彰）、訪日フェロー経験者との懇談、ソウル・ジャパンプラブの役員および日本人特派員との朝食会（特に在韓経験30年を超える産経新聞の黒田特派員には毎年、興味深い話を聞かせていただいた。）訪韓団の感想文は、毎年まとめて冊子にしていたので、これを読むと当時のことが鮮明に思い出されます。

基金の事業は、日韓両国の歴史認識の問題に端を発し、国民間の相互理解を深めることを目的としています。両国の歴史認識が完全に一致することは、本来ありえないと思いますが、相手の立場を理解することは必要です。最近の状況をマスコミ等で見ていると、まだまだ道半ばとの感がしますが、関係者の皆様の一層のご努力を願ってやみません。



## 日韓の隣交は悠久である

阿部孝哉(参与・前業務執行理事)

長い間日韓関係に携わってきた私にとって、日韓文化交流基金において文化交流という未来志向的な仕事に従事できたことは幸いであった。

5年間の基金在職中は、JENESYS（東アジア青少年大交流計画）、東日本大震災復興のためのキズナ・プロジェクト、JENESYS 2.0といった一連の青少年交流事業に関与する機会を得たが、近年日韓間の交流分野が多様化し重層的関係へと変化する中で、青少年交流や文化交流は、政治・外交関係とは別次元の地歩を築きつつあるとの印象を受けている。

また、30周年記念事業として日韓の中高生を対象に作文コンテストを実施してみたところ、民族主義的な歴史教育を受けてきた韓国の中高生が韓国の歴史教育に束縛されることなく、豊かな感性と柔軟な思考をもって日韓関係を見ていることを知ったのは新鮮な驚きであった。

今や、アニメーションやpops等の文化コンテンツがインターネット等を通じて国境を越えて飛び交う中で、日韓の青少年が相手国の文化に接する日常的空間が広がり、既成概念の枠を超えた意識の変化をもたらしている現実が見える。

他方で、2013年は、政治的・外交的軋轢から日韓両国の新政権の間で首脳会談の開催の見通しも立たないといった非正常な関係が続いた一年であった。

かつて、駐韓大使を歴任した基金の初代理事長須之部量三氏は「日韓関係に問題はつきものである。要は、問題が起きても感情的な対決に発展しないよう、双方が冷静に問題を一つ一つ処理していくような関係なり雰囲気ができ上がるのが望ましい」旨述べたことがあるが、日韓関係には摩擦がつきものであるとの覚悟を持ち、それを解消していく忍耐と知恵が両国

民に求められるところである。

歴史認識の問題については、韓国は多様な歴史観を許容する風土を醸成すべきであり、日本人は日韓の歴史に無知であってはならず、また韓国におもねるような態度をとるべきでもない。

日韓の隣交は悠久なものであり、風雪に耐えながら国民レベルの交流で支えていく努力を繋いでいくことが大切である。基金の設立の理念と目的も正にそこにあり、青少年交流と学術文化交流事業を地道に踏襲していくことが基金の使命であると思っている。